

会議の概要(議事録)

会議の名称	3-23	第6回墨田区立学校適正配置等審議会		
開催日時	平成17年4月15日(金)午後4時00分から午後6時15分まで			
開催場所	墨田区役所 第一委員会室			
出席者数	28人【委員】尾木和英 堀内一男 早川幸一 中沢進 沖山仁 槐勲 片倉洋 及川勝男 小幡昇治 奥住益宏 大倉正敏 高島隆一 志波洋子 森八一 粕谷秀雄 西城敬功 川島康義 阿部貴明 登坂達雄 長谷川ミチル 【事務局】次長 庶務課長 学務課長 指導室長 すみだ教育研究所長 生涯学習課長 区立学校適正配置担当主査 区立学校適正配置担当主事			
会議の公開 (傍聴)	公開(傍聴できる)	部分公開(部分傍聴できる)	傍聴者数	13人
	非公開(傍聴できない)			
議題	1 墨田区立学校適正配置等審議会(第5回)の記録について 2 第5回審議会資料の修正について 3 第5回審議会において請求のあった資料について 4 区立学校の適正規模数の検討等 5 次回(第7回)審議会の開催日について			
配付資料	1 第6回墨田区立学校適正配置等審議会【次第】 2 第5回墨田区立学校適正配置等審議会 議事録(案) 3 墨田区立学校適正配置等審議会第1~4回審議会「論点整理」 4 これまでの検討を踏まえた「論点整理」(案) 5 小・中学校の位置及び通学区域図 6 進学先が複数に分かれている小学校及び通学区域が複数に分かれている町会・自治会 7 平成16年度 小学校と中学校との連携の状況に関する調査結果 8 平成17年度学級編成調査の概要(平成17年4月7日現在) 9 区立学校の適正規模数の検討			
所管課	教育委員会事務局 庶務課 区立学校適正配置担当 (内線5136)			

第6回墨田区立学校適正配置等審議会 議事録

1 墨田区立学校適正配置等審議会(第5回)の記録について

会議の概要の内容について確認した。会議の概要と資料についてホームページ及びPRコーナーにおいて公開する。

2 第5回審議会資料の修正について

- ・資料 墨田区立学校適正配置等審議会 第1～4回審議会「論点整理」 庶務課長より資料説明。
- ・資料 これまでの検討を踏まえた「論点整理」(案) 庶務課長より資料説明。

3 第5回審議会において請求のあった資料について

- ・資料 小・中学校の位置及び通学区域図 庶務課長より資料説明。
- ・資料 進学先が複数に分かれている小学校及び通学区域が複数に分かれている町会・自治会 庶務課長より資料説明。
- ・資料 平成16年度 小学校と中学校との連携の状況に関する調査結果 指導室長より資料説明。
- ・資料 平成17年度学級編成調査の概要(平成17年4月7日) 学務課長より都立中学校や開発状況の東京都児童・生徒数推計への反映について及び資料説明。

4 区立学校の適正規模数の検討等

- ・資料 区立学校の適正規模数の検討 庶務課長より資料説明。

【主な意見】

会長：審議を進めていく上での1つの拠り所になる資料であり、何らかの予断を持つことのないよう留意し、具体的な数字についても手掛かりにはするが、審議の結果が束縛されるものではないことを承知して頂きたい。

委員：1学級あたりの平均児童数は供給過剰の学校数の数字で、当然適正な規模を目指した学校数になったときには、40人に収斂されていくので、現在の学校数で想定した平均児童数で学級を割っていくのは意味が良く分からない。1学級40人ならば40で割らないと、今までの流れと違った算数になってしまう。適正規模に近づいていけば1学級数の平均児童数は上がって40に近づいてくる。

事務局：今後も指定学区域制度も残しつつ学校運営していく中では、必ず同じような状況は現出する。複数校で学級を編成していく中では、結果として40人ぴったりとはならない。現行の小学校・中学校を前提としながら、適正配置を考えた際、実態として無理であろうと考えている。

会長：現在の学校の制度・実態から言うと、こういう数字になるということで、40人で割り返すとかえって実態から離れていくという気がしているが。

委員：適正な規模に揃えていこうとしたときには、クラス数は減ることが前提でなければ効率化されない。

副会長：ここはあくまでシミュレーションである。1つの学校の学級数が増えていくことはあるが、学級は固定して考えている。

事務局：仮に学級数は墨田区全体として考えた場合変わらないかもしれないが、1学校のクラス数は変わる。

会長：我々は現状に立って議論をしていき、その中であるべき姿が出てきて、どうなるかという話になる。

1つのクラスを40人に近づけていくことを前提として学校を割り出していく方法は、理論として

はあるが方法論としては疑問があり、できるだけ 40 人に近づける方法はないかという議論が出されればあり得るかもしれないが、今の時点でそれを織り込んで議論は難しいと思うが。

委員：学校の規模が適正になり、1 学年の規模が大きくなると、平均すれば自然に 40 人に近づいていってしまう。学校の規模が大きくなれば大きくなるほど 40 人に近づかずである。

会長：この審議を続けていって適正配置を考えた場合にはそういう方向に行くかも知れないが、いずれにしてもそのことを前提にして審議は少し難しいのではないかと思うが。

委員：40 人に置き換えてもう 1 回シミュレーションをして表を作れば、より具体的に分かると思うが。

委員：審議を進めていく上での資料で、この先 30 人と仮に決めて、東京都が 30 人と踏み切った場合、墨田にとって適正問題はどうかという問題も出てくる。シミュレーションのあり方についても、検討が必要なのではないか。

委員：学級数で一番大事なのは墨田区にいくつ学校があったら良いのかではないか。1 つの学校として学級の規模は 12~18 が良いだろうと 1 つの案が出ている。学級数は定員として 40 は現在のところ決まっているので、それをどうのこうのというのは、大きな議論になってしまう。まず、学校としてどのくらいの学級数があったら良いのか、そこを大事にしたほうが良い。40 人にしなくてはという議論は別の問題ではないか。

会長：40 人でシミュレーションした場合に、そういうものが出てきてこの審議が進むかどうか。

委員：現在のシミュレーションを基に審議して、必要な学校数が決まったあとで、例えば 10 年後には実態から離れてしまうということだろう。再編があった場合に 1 学級あたりの児童数が増えることは当然のことだと思う。この審議会が終わって実際に取組みが始まれば、現在と違う 1 学級あたりの児童数になることは確実だ。

会長：小委員会での今の発言については引き取り、いずれにしても 40 人の資料は整理して提案をする。現在はこういう形で進んでいるので、今日の審議は予定通り進めて、やはり重要だということになれば次回以降、このことも加味して議論を進めていく方向が望ましいと思ったのだがどうか。

事務局：事務局として 1 学級あたり 40 人という前提でシミュレーションすることはできる。ただ、実態としてそうした数字を出したとしても、1 学級あたり 40 人いることはあり得ないと思っている。将来を推計する場合は、現状を踏まえた中でどうあるべきか見ていかないと、整理できないと感じた。

委員：1 学級あたりの児童数を 40 人と言っているわけではない。小委員会で引き取って頂いたほうが良い。

会長：一番かみ合っていない点は、事務局もそう受け取られたようだが、私も 40 人で資料を出すことがこの議論の中であまり意味を持ち得ないのではないかと判断した。

委員：統合した隅田小学校の例では、学級の子どもの数は統合以前より統合後のほうが上がっている。適正配置の学校、適正規模の学級数にした場合の各学校のクラスの平均人数は当然上がっていくことが前提だということだと思う。40 人は実質あり得ないと想像はできる。

委員：学校数が減ると必ず学級の数が増えるので、現状で審議するのではなく、1 学級何名くらいだと良いのかという審議をしていかないと意味がないと思う。

委員：クラス編成をすることは基本的なことで、それを割る人数は大事なことになる。それが 40 人はあり得ないが、どの数字が良いのかということになると、大きな議論になってしまう。今までの数字で割るのが当然と思っている。

会長：シミュレーションで議論が行き、ある程度輪郭がはっきりしてきたときに、その議論は出ると思っ

ていた。しかし、それを前提に審議会はシミュレーションが成立しないし、議論が進まない。あくまで40人学級を前提とし、現在の児童数・学級数を前提としていかにざるを得ないと思う。40で割り返した資料があった場合に、どういう参考になるのか小委員会で少し検討させて頂きたい。

委員：40人で割る資料が欲しいと言っているのではなく、現状の学校数をベースにした平均児童数で割り算をして良いのかということである。仮に民間の塾みたいなところであれば、本当は40人に1人の先生がつくべき状態であるにもかかわらず、29人で放置していること自体が問題だ。経済的な効率を求めるのであれば40人に収斂していくのがベストだが、公立の学校なので、子ども達の環境、通学距離の問題等がある最終的に40にはならないが、学校数が減っていけば統合例で当たり前のことで、1クラスの人数は適正な規模になればなるほど増える。それをどの数字に置くのかは考え方の問題だが、今の割り算の数字で置くのは違うのではないか。

会長：具体的にはどういうことを請求され、どういう議事進行をするように言っているのか。

委員：これをベースにするのではなくて、適正な規模になっていった40人学級制度の中で、実態の学級数はどのくらいかで割り算をするべきではないか。35までは良い、あるいは36くらいが適正として考えられるというのであれば、それをベースに割り算をするべきだと申し上げている。

会長：29人の学級は放置されているという言い方をされたが、放置というのはどういう意味か。

委員：放置というのは29人の学校は、21人の学級、23人の学級、ましてや15人の学級とかは、小規模で不適切だから変えようとしている。子どもの数が少ない学級は今の議論では、言葉としては放置されているという考え方だ。

会長：学級、適正な子どもの数ということから議論をして、そこから入るべきだという意見ということとは分かったが、議論の進め方は難しい面がある。

委員：1クラスで何名がふさわしいのか教育効果や様々な面で健全な育成を基準に考えるのが第一ではないかと私はとったが、今の学級編成の基準は40人と決まっているので、それを崩すとすると別の議論になってしまうのではないか。現在の日本の教育の学級編成の基準は40人で、その現状をシミュレーションしている。議論の1つの目安としては、むしろ当然ではないか。

委員：教育効果から見ると小学校は1学年2学級、12から18学級。中学でもそうだ。中学校を1つの核として周りの小学校が群を作る、そういうシミュレーションを事務局で作ってくれた。結果として40人となると作業が大変だし、当会で40人と決まっているので、学校の数を出して平均するところという数字が出てくると思う。会長のとおりに進めて頂いて結構だ。

委員：40人学級は、40人を理想として決めているのではなく、ぎりぎり我慢できる人数で、実際に39人の中学校のクラスだと授業参観に行っても保護者が教室に入れにくいくらいだ。適正配置でより良い学校の規模、クラスの規模を考える議論をしているので、逆に何人くらいだったら一番良いのか、ぎりぎり我慢できる数は国が決めた40人だとしても、理想的とできるのは何人くらいか議論を始めても良いのではないかと聞いたかったのだと思う。結果的にはここで出た数字とそんなに変わらない数字になるかもしれないが、適正なクラスの人数も考えても良いのではないか。

委員：今の実態の数字では駄目だと言っているのではなくて、修正値を加えれば小学校や中学校の必要数が変わるのかどうかということではないのか。1校違うと現場としては大きな出来事だ。この審議会が閉じて着手になって実態に近づいたときに、本当はもう1校余計にあったほうが良いとか、もう1校必要でなかったということにならないように問題提議されていると私は理解している。

会長：今の方向であれば、考えていた審議の方向と重なっている。あくまで推計でこういうシミュレーションを通して、12~18学級という幅があり、小学校の1km、中学校は1.5kmの学区域図が出

され、町会と学校との関係等の問題を議論に入れて、どの辺の学級数を目安に置くか議論が出てきた時に、1つの学級、学校数の想定が出るので、今言ったような人数がどの辺が理想なのか、この辺の規模の方が望ましいのかという議論にいくと考えていた。やはり実態から議論をしていかないと手掛かりがないだろうと思う。それから、40人の数で出して、そこからスタートすべきではないかと私は受け取ったが、それは違うということが分かった。このまま議論を進めていって、もう少し固めていくところで40人に近づけるためには、もう少しこのところはどうではないかという議論であれば、このままで進められるのだが。

委員：40人学級が駄目という話をしてしているのではない。40人学級については当面堅持されて、それが前提で話をしているのでそれで良い。40人学級という仕組みの中で現実的に考えていったときに、適正な規模に学校が集約をされていくと、1クラスあたりの平均児童数は増えていく。その増え方がどれくらいになるのか気にしながら行かないといけない。逆に40人で割ると下限は明確に分かる。効率はどんどん上がってくることが前提で、子ども達の教育環境も整備をされていく。ここに書いてある学校数がイメージとして一人歩きするのは危ないと思う。

会長：今のような審議を経た上で、当面このやり方で審議を進め、どこかで資料を提出する形になるか別の形になるのか、小委員会で少し議論をした上で、今の発言の趣旨は活かしていきたい。

委員：40人の学級数の前提について、反対とは言っていないと思う。例えば15学級にすると平均児童数が40人に近くなるのかどうかという意味を含んでいると思う。12~18学級の定義があるのかなのか、ふさわしい学級は範囲があるので、どこら辺まで縮めたら良いのかによって平均児童数が変わってくる。

会長：議論のベースが現状の数字で固定化されてしまって議論に影響を及ぼすのは望ましくない、理想としているのは、40人学級を前提としてどういう規模があり得るのか議論するのだから、そちらの資料や情報が提出されないと議論の偏りが出るのではないかと発言されている。それをどう審議の中に活かすか小委員会でももう少し考えて、次回以降何らかの提案をすることで、当面は予定通りこのまま議論を進めるということが良いか。では、元に戻って他の点で質問があれば出して頂きたい。

委員：巷ではかなりいろいろな話が出回っていて、かなり皆さんナーバスになっている。第三寺島小学校の学校運営協議会会長、PTA会長から手紙を預かったので、読ませて頂く。「朗読」PTA関係で16校が全部集まって、様々なPTA会長の話の中で出た。

委員：中学校の適正規模は12~18クラスだが現状9クラス程度の学校が多い。教職員が十分配置できるクラス数ということで12クラスと行政から話があったが、子どもの立場として実態に即してみたときに、3クラス90人あるいは100人程度の子供達は、一人一人の子供にいろいろな場や役割を与えてもらえ、一人一人を活かすことができる数だと思う。子どもの立場からしたら講師の先生であっても良いのではないか。12学級ではないといけないのか。それから、適正な学校数は何校かという方向から話が進もうとしているが、目安にはなるかもしれないが各学校の実態があり、今置かれている状況や子どもの数や地域の密着度の問題を考えて適正に配置していった結果何校になったという論議なら分かる。最初から例えば中学校は何校にしましょう、じゃあどこをどうしましょうという議論はどうなのか。もう1点、通学区域で中学校の場合、1.5kmはかなり広い範囲で、1.5kmの円では3つくらいの中学校で済んでしまう。墨田区内は人口が密集しており交通量の激しい通りも多い。もう少し狭い範囲に区切った論議はどうなのか。

会長：実態とか意見も是非出して頂きたい。この審議会は数字合わせで進める審議会ではないし、何校という前提に立っているわけでもない。委員の中で衆知を集めて最も良い方向を出すという審議会な

ので、誤解のないようお願いしたい。今後この審議会を進めて最後に取りまとめになるが、区内全部の学校、いろいろな地域の事情等を考えると、その全てにとって素晴らしいものに近づけて努力はするが、若干の問題が残るものもあると思う。最後の2回くらいで、こうした残る問題については集中審議をして、それをこの審議の中に盛り込むのか、別の形で意見・要望を添付するか諮って、それも併せて審議会の総意として提出をして実行に移して頂く、こういう手続きになると思うので、理解と整理をして発言を頂ければと思う。

委員：何校になるかという問題で、もうそれが奇麗事だ。学校の数で予め定義して、陰でそうなっていて、そこで何校になるか分からない云々なんていうのはナンセンスな話だと思う。

会長：初めて伺ったが、何かそういう話みたいなものがあるのか。

委員：やはりPTAの役員ではそういう話がどんどん広がっていく。いろいろな決め事でもPTAが行って決められることは本当に数が少ない。みんな単純に行政が決めたり、そういう形で動いている。奇麗事で何校かはここでは分かりませんと言っても、通用しない話だとなってしまう。

会長：もう何校という前提に立ってやっているという話は今初めて耳にしたが、それはあり得ないことだ。それで前回、資料を回収させて頂いたときにも、先程も資料が一人歩きをして、もう審議会ではこんなふうになって、ここがこうなのよみたいな話になっては困ると思って申し上げた。是非そこは委員の方々も努力を頂いて、そういうことではなくて公正に審議会を進めていると、もしそういう発言があったら理解を深めてほしいと思う。

委員：数字や地図の区割りの問題などが出されてくると、実態が横にそれて行き始めているような気がしている。中学校の場合、大規模・小規模が発生してきているのは選択制の影響が大きいと言える。子ども達の教育環境をより良く整備していくためには、学校現場の立場の話を知った上で考えてほしいと思う。中学校の校長会でも、教育指導面や教員組織面での課題や成果について意見を出し合った。安定した学校規模を図ることが非常に重要なことではあるが、現状が選択制であることから、適正配置をしたとしても子どもや保護者が構想どおりに学校を選ぶことはないのではないか、小規模校化の発生によって進行する諸問題の解決にはつながらないのではないかという見方が大きいと思う。地域の学校に通い、地域の方々から見守られながら育てることが理想であるので、そのことを第一として適正配置を検討してほしい。学校選択制とリンクしない、選択制を止めない方向でいくならば、継続するための条件が必要ではないか。適正配置を進めたとしても、いずれ大規模化、小規模化になっていくというのが、多くの校長の懸念するところである。学校で解決すべき問題は、最大限の工夫や努力をして解決していくが、制度の整備で解決できる部分は、良い条件を考えて頂き、より良い教育環境ができることを願っている。

委員：教育効果の面では、小学校で6年間で1回ないし2回の編成替えができるような規模が良いのではないか。児童・生徒に能力の差があるため、学級編成替えがあると、能力が発揮される児童もいるし、先生によっては1人の先生がその子がいたずらして悪いということ6年間引きずってしまうので、1学年複数学級あることは大賛成だ。あくまでも教育効果の観点から、どういう学校の適正配置が良いのか考えたほうが良い。

委員：出された資料が一人歩きをしてということよりも、審議会の議論の中身ではなくて、事務局とか小委員会での検討が逆に一人歩きしてしまうと本来の果たす役割からも離れてしまう。当初計画の12月最終答申というスケジュールはあるが、墨田が抱えている現実の問題、選択制の問題も規模の問題もいろいろな角度から議論がされて、結果として当初のスケジュール通り行かない、しかし答えを出していかなければならないスケジュールは決まっているので、そのときにまた検討すれば良い

問題だと思う。1 学級何人が適当なのかという角度からの議論を進めるべきではないかという話もあった。それは議論を元に戻すというのではなくて、ある意味では同じような議論をやったが、大事な発展だとも思うので、引き続いて議論を深めていく必要があると感じた。

委員：選択制の問題は離れられないという議論がされてきた。しかし、この問題がこれからも入っていくと、的が絞れないという現状になりつつある。選択制の問題は、私達は責任もって行動して認めてきたが、今回の諮問にうたわれてはいないが適正配置に関して重要な問題なので、この答申が出来上がった後、改めてこの問題と関係を含んで考えたらどうか。

委員：選択制の問題は別個で考えて、改めてこの問題は議会で、選択制で生じる問題を審議するのか。

委員：そういう意味ではなくて、3年経過したので、その問題を含んで一緒にこれを考えていく。選択制は答申と別に議論をこの関係でまた話し合う必要があろうかと考えている。

会長：あくまでも審議会として適正な配置はどうあるべきかそれぞれの立場で発言を頂き、その発言は重要ではあるが、委員の一員として最も妥当なまとめに向かって協力頂ければと思う。それぞれのものについては最後に、この答申に盛り込むべきなのか、要望という形で出すか、またお諮りを出したいと思っている。審議をまとめたものが、即実施に移されるわけではなく、教育委員会で実施案を作成し関係の方々とは協議されながら実施に移していく。そうしたことを整理して、1 の基本的な考え方の確認と、基本的な要件と、中学校を軸に小学校をブロック化して再編整備をする方向が今日出されていたが、ここは発言がなかったので、今回はこの点にも触れて、まず今後の流れを見たいので、これまで見てきた学区域の問題、町会と学校との関係等を織り込みながら、どういう妥当な線が最も望ましいのか発言を頂き、議論を進めたいと思っている。

委員：資料の場合は事前に配布して頂けるとありがたい。審議の時間の中で見ていくことになってしまうともったいないと思う。

委員：全く同感で、第1回の審議会のときに同趣旨のお願いをして、会長も事務局にそういう努力をとって頂いたと思うので、私からもお願いしておく。

事務局：事務局としても極力、事前に資料を作り配布し、それを十分ご覧頂いた上で当日の審議会に臨むのがふさわしいと思っている。今後とも極力そういう方向で努力をさせて頂きたい。

委員：事前に出ると、それでなくても論議の中で一人歩きをしているとあったので、公正な適正配置の議論が出来なくなってしまう。出して良い概要と間違った情報が流れて適正な審議が出来なくなるようなことはいかがかと思うが。

委員：この数字は発表されている数字であり、この資料は前にも一度もらっていると思う。

会長：私も先程の発言の中にもう何校と決まってやっているのではないかという発言があったので申し上げたが、数字のためにやる審議会ではないし、ある前提の基に進めていく審議会ではないので、全体を考えて発言を頂き、より良いものにしたいということを理解して、この資料については考えて、このことが予期しない動揺を招かないように、十分ご配慮を頂きたいということが願いである。是非趣旨を理解して頂きたい。

5 次回(第7回)審議会の開催日及び今後の審議会開催日(案)について

第7回審議会：平成17年5月17日(火)午後4時から、第一委員会室の予定。